
第3回「大阪・関西万博に向けて
～機運醸成 京都ラウンドテーブル」

開催報告

第3回「大阪・関西万博に向けて～機運醸成 京都ラウンドテーブル」

開催報告

「大阪・関西万博に向けて～機運醸成 京都ラウンドテーブル」を、2023年11月20日(月)世界文化遺産 醍醐寺にて開催した。第1回、第2回に引き続き、大阪・関西万博プロデューサー6名がリアルに集まり、各プロデューサーが進めている大阪・関西万博の取り組みについて語っていただいた。

I ご来賓のご挨拶

◆京都府副知事 山下 晃正氏



万博のメインテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」は「みんなが輝く共生社会を作ろう」ということだと感じている。誰もが命は大事だと思っているが、ウクライナや中東で大きな紛争が起こり、共生社会をつくるのは並大抵ではないと実感している。万博への様々な意見は、万博の理念をどれだけの人が心の底から理解しているのか、共鳴しているのかにもよる。京都では万博から新しい時代を始めるために何をすればいいかと1年以上議論を重ね準備しているが、その中で生まれたものが次の

世代を作っていくものだと思う。多くの方々のご理解を得て本番を迎えられれば必ず成功するだろう。

◆京都市副市長 岡田 憲和氏

醍醐寺でラウンドテーブルが開催されるのはとても京都らしい。今、オール京都で大阪・関西万博にどう関わり、協力し、その成果を共有するかという議論をしている。京都で大阪・関西万博を考えると、京都らしい歴史・文化・自然・空間などを前面に出して貢献できればと思っている。醍醐寺で開催された日本国際芸術祭では京都市の多くの事業で連携させていただいたが、これからも多くの関係機関の皆様と勉強させていただき、開催に向けて、また開催中も多くの京都の特性を生かして全力で取り組んでいきたい。



II (公社)2025年日本国際博覧会協会 プロデューサー6名のスピーチ

◇ 藤本 壮介氏 会場デザインプロデューサー



19世紀に始まった万博は最新産業などの見本市的なものであって、1970年の大阪万博では、本当に世界の様々な新しいもの、珍しいものを見る博覧会となった。では21世紀の新しい意義とは、今の時代だからこそ万博はとて大切になってきていると考える。今回、150~160カ国が自国の文化・伝統、自然風景、食、人そしてアートその全てを持ち寄り、夢洲内で6ヶ月間一緒にいる。世界中見回してもこういう機会は他になく、交流を通し何か新しいことが生まれてくる。今、多様性の時代と言われ

ると同時に世界が分断している状況もある。その土地独自のあらゆるものが一つの場所に集まり、世界は繋がることのできるのか分断のままなのか、こんな時代だからこそ非常に大事になる。会場のリングは色々機能的な意味や役割を担うが、何より世界中の人がこの中に一緒にいて交流をして繋がる、多様性は繋がることのできるというメッセージを発信できるのではないかと考える。文化圏やジェネレーションを問わず誰もが一瞬でわかる、そういうシンプルな丸を作り、その中に各国のパビリオンとテーマプロデューサーパビリオンがあり、ここから世界に多様性が繋がり新しい未来を作っていくことを発信していきたい。リングは木造で作る。世界的に木造建築がこれからの時代の最新建築として非常に注目されている。木材は持続可能な再生可能な素材で、育つ過程で二酸化炭素を吸収する。製材して建物に使えば二酸化炭素が固定化され、切り出した後に新しい木を植え、半永久的に建材が育ってくる。そういう意味でこれからの未来の現在である。日本は1000年以上も木造建築の伝統を持ち、最先端に躍り出ることができる。万博の機会に日本の伝統を現代にアップデートした形で作り、世界をお迎えする舞台を作る。1000年の日本の伝統建築に繋がる木造建築の未来ビジョンを会場デザインに込めた。リング中央に作る静けさの森には、これからは人工物でなく自然を中央に持つことで人間と自然が共存していく未来を作っていこうというメッセージも込めている。各国館の工事も準備は進んでおり、それ以外の協会プロジェクトは順調であり、メディアでいろんな情報が流れているがしっかりと作っていき

◇ 石川 勝氏 会場運営プロデューサー

今日は大阪・関西万博のコンセプト「未来社会の実験場」についてお話す。一つ目は「テーマウィーク」で、大阪・関西万博の3つのサブテーマ及びメインテーマから派生したテーマ8個を設定した。会期中に1週間程度の期間を設け、会場全体で一つのテーマを共に考える。1994年の国際博覧会条約締結国総会で、万博は課題解決に資する取組みとすることが決議され、それ以降開催された5回の大きな万博で、各国が色々と工夫をして様々な事業を行った。テーマウィークはドバイ万博で始



まったが、先日の IPM (international planning meeting) でも多くの国がテーマウィークに高い関心を示しており、テーマウィークがどれだけ万博において重要かということだと言える。万博は世界中の国々が半年間同じ場所で時を過ごす唯一の取組みであり、時間をかけてしっかり地球的課題について語り発信することは大きな意味を持つ。万博が地球的な世界的な合意形成の場として非常に優れた場であることを証明してくれるような事業だと思っている。二つ目は「未来社会ショーケース事業」で、スマートモビリティ万博。空飛ぶ車事業は、運航事業者がそれぞれ機体メーカーと組み、具体的に事業が進んでいる。水素船も出航する。会場内の外周は走行中給電をする新しい技術を取り入れた電気自動運転バス（一部ドライバー一部自動運転）が走行するなど、パーソナルモビリティやロボット等のプロジェクトも現在進行形で進めている。アート万博としては、ウォータープラザ水上ショーや静けさの森のインスタレーションがある。デジタル万博としてはパーソナルエージェント、自動翻訳システム、オールフォトニクス・ネットワーク、無線 LAN 環境・ローミング基盤、EXPO VISION、プロジェクションシステム等々が進行している。またバーチャルサイバー空間に会場を作っている。脱炭素の取組みでは、GHG プロトコルを万博として初めて採用する。Scope1、Scope2 のエネルギーとして排出する量は、省エネ排出ゼロ電力等によりカーボンニュートラルを目指す。Scope3 の間接的に発生するものは、様々な努力で削減に取り組むが、世界中の来場者により発生する CO₂ は、自ら CO₂ 削減に取り組む意識が芽生えるよう啓発していくグリーンチャレンジも行う予定である。Scope 1, 2 では会場内でカーボンリサイクルファクトリーあるいはペロブスカイト太陽電池や水素発電などの新しい技術を実際に会場内で体験できるように導入が進んでいる。更にフューチャーライフ万博は、未来の都市を感じていただく施設、多くの企業が集まり協働して未来の都市を描く事業を行う。未来の暮らしを体験いただくフューチャーライフエクスペリエンスでは、1 週間を単位として中小企業やスタートアップの企業の方でも参加できる仕組みをとっており、現在出展者募集中である。未来の行動は、TeamEXPO の皆さんが万博会場で発表する場所となる。そして万博では全面キャッシュレス化を推進する。万博をきっかけに日本のキャッシュレス一気高めたい。電子マネー「ミヤクペ」、「ミヤクポ」ポイント、「ミヤクーン」NFT と個性的な名前のついたサービスを行うことが記者発表された。2023 年 11 月 30 日から前売入場券の発売が開始されるが、電子入場券、来場予約、パビリオン予約で万博の混雑・並ぶ・時間の無駄を解消したい。大阪・関西万博は約 2,800 万の来場者が想定される大変壮大な事業である。この凄い人数を受け止め取組んでいかなければならない。今の段階は前売券を購入いただく人を多く作る。そのことがこの大阪関西万博を成功させる上で避けて通れない。面白いからだけでなく皆で万博を成功させようというムーブメントがしっかりと起きないと、万博の成功に辿り着けない。サイレントマジョリティーでなく行動するマジョリティーとなり一緒に前売りの段階から万博を盛り上げられるよう、地域全体で取組みをしていくことが重要ではないかと考える。

◇ 石黒 浩氏 テーマ事業プロデューサー

万博をする意義は普段あまり考えないが、人間や地球の環境などを世界中の人と色々な議論をしながら未来に向けて色々な考えを酌み交わしていくところが一番大きな意義だと思う。日常生活では未来についてきちんと議論をして考える機会はなかなかなく、この万博を機に 20 年 30 年 40 年先の未来をみんなで考え、未来に希望を持っていく。そのために万博があるのかと思う。会期後も何十年もそういった議論が続きレガシーとして残っていくことで、万博を開催したその大きな意義が生まれてくる。70

年大阪万博から 50 年を経て、生きた命を自ら設計することが人類の未来ではないだろうか。技術、ロボットに宿る命をこのパビリオンで展示し、皆さんと一緒に未来を考え感じていければと思う。人工臓器遺伝子操作、人間らしいロボット、AI によって人間の定義を拡張し、人間を進化させる科学技術がある。生物的進化だけでなく科学技術による進化の方法も持っており、それが人間たらしめている。これからは更に科学技術を発展させ、科学技術と融合しながら、命の可能性を飛躍的に広げ、その多様な価値観と幸福感で人間自身や人間社会、そしてそれを取り巻く環境や生態系を発展させていく。パビリオンはイメージ図のとおり進んでおり、我々のパビリオンでは人間社会の新たなあり方を創造し展示する。自らが責任を持ち進化していく、自らの価値観と幸福感で未来を作っていくそのきっかけになるべくパビリオンを準備し、万博全体としてそういう役割を果たしていきたい。人間とロボットの境界がなくなる未来もやってくると思う。物理空間、データ空間、物理的な体、データとしての体、寿命、記憶などの様々な制約から解放され、人を超越した存在としてのアンドロイドロボットが「いのち」について語りかける。Android ロボットの視点、来館者の視点、バーチャルでのアバターの視点が交差し、来館者は「新しいいのち」について気づく。パビリオンの展示の最後の方では、こういった未来の人間の姿が展示できればと思っている。パビリオンのゾーン 1 は人間と技術が共生する世界への導入として、土偶や埴輪、文楽など日本の歴史とに関わるようなものを展示して行きたい。2F のゾーン 2 は 50 年後の未来。50 年後どういう未来がやってくるかを展示する 7 つ位のシーンを主に展示する。ゾーン 3 では 1000 年後の未来。人間とロボットの境界がなくなるような未来を表現できればと思う。これらはアーティストの人たちと一緒に作り上げる展示である。太陽の塔の中には原生動物から人間までの進化の木が入っていたが、その進化の木の先、1000 年後に家はどう発展していくかをゾーン 3 で見せることができればと思う。パビリオン全体としては命の期限、命と技術の期限 50 年後の未来、1000 年後の未来の 3 ステージ、3 つのゾーンで人、ロボット、アバターの視点が交差し、新しい命の可能性を皆さんに知ってもらえるような展示ができればと思う。いろんなロボットが登場する。特に 50 年後の未来（ゾーン 2）は、協賛企業の皆さんと一緒に進めてきた。50 年後にも存在し得るような技術を元に 50 年の社会がどう変わっていくのか、どういう新しい価値が生まれるのかを議論して展示内容を積み上げてきた。他にはいのちの未来パフォーマンス、ロボットや音楽やいろんなものを駆使する。いろんな方を招いて未来について議論するようなライブトークショーなど、みんなで未来を感じて考えるようなイベントができればと思う。人間はもっと生きたい命をもっと自由に生きられるんだ、そういうメッセージを残したい。



◇ 中島 さち子氏 テーマ事業プロデューサー

約 150 か国の方々が参加した IPM では「こんなことを考えている」「この万博を機会に日本ともしっかりいう事をしてみたい、コラボレーションしたい」と話していた。今回のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」は自分たちの国や未来についての夢を話し、命について語り合うことができる。世界中い



ろんなことがあるが、万博だからこそ、様々な違いを抱えた人たちが一つの場所に集まり、違いの中で対話をしていく。テーマウィークにはそういう大きな期待や可能性を改めて感じる。また、10月にアフリカのエチオピアとケニアに訪問し、ケニアでは Teach For All という世界中の先生方が集まり教育の未来、先生たちの未来について語り合う国際会議に出席したが、ランチミーティングや色んなミュージシャンたちと話したり夜にセッションしたりと非常に面白かった。世界中の音楽・踊り、

ファッションなどに繋がり、みんな全く違うが近い感じがした。20年ぶりに今年日本で開催された国際数学オリンピックに、120カ国の子供たちがやってきた。やはり世界中の人が出逢うことは非常に爆発的なエネルギーである。知っているようでまだまだ知らない。文字で知っているのと全く違うことがある。先日の日本国際芸術祭では、ワークショップで子どもたちと楽器を作ったり、野点茶会を行った。醍醐寺の声明の皆様と一緒に音楽ライブで演奏させていただいた。モノだけでなくコト、出逢いが当にいのちで命が生きていることだと思う。私たちのクラゲ館は、テーマ事業として「いのちを高める」、遊び・学び、芸術スポーツを通じて生きる喜びや楽しさを感じて共に命を高めていく共創の場を作っていくことがプロジェクトである。創造性や命にとり大事なのはやはり揺らぎのある遊びや余白、必ずしも言葉で説明しきれない原始的なもの、身体性なものが大事でないかとメンバーたちと一緒に考えていく中でクラゲのイメージが出てきた。障がいのある方々の意見をいただき検証しながら進めている。2Fは開かれた公園一五感の遊び場というオープンスペースで、セッションやワークショップができる。予約者が入れる1Fに少し暗闇で静謐の状態となる場所を設け、最後に命や祭をテーマにしたシアターで終わる。建物の外側に小さいステージを用意する。世界各地の郷土芸能、郷土の価値みたいなものを大事にしながら再び未来を目指すことを考えている。8月には大きなイベントも考えている。最後に、創造性の民主化というか、1人1人が創造性を持ち未来をつくる責任があり、同時に未来をつくる可能性に満ちている。技術などの力で今内在するいろんな問題を乗り越える社会や文化を作っていくというのが大きな目的になっている。そのために弱さの価値、みんなが持つ弱さをちゃんと出して対話をしていくことができるような環境、社会文化を作っていく。本当に万博を通じていろんな違いを乗り越え、みんなが自分を大事にしながら他者と巡り合い、考えを深め対話をしていくことが、いのち輝く未来社会をデザインしていくのではないか。いのちを高めるクラゲ館は色んな多様な人たちが一緒になって動いている。皆様方とも何か一緒に作っていくことができれば光栄である。

◇ 落合 陽一氏 テーマ事業プロデューサー

私たちの最大のコンセプトの一つは展示会でよく見る日本風な小さな展示みたいなことはしないということ。動いて伸びて縮んで変形する外装建築。このような変形する建築、人類がまだ作ったことのない新素材とロボットと建築の塊が出来る予定である。建物（null²）の内側は人間をデジタルヒューマンという自分とそっくりの見た目、同じ声と同じ反応を持つAIに変える。それを何百万人残せるかがレガシーとしてある。外装を作るのは本当に難しかったが企業様に頑張ってください、なんとか伸びたりする膜ができて無事に形ができてきた。史上初の動いて伸びるパビリオンになるはずである。太陽光を集

めることもできる。蓄光館は透明で蓄光ガラスに反射して綺麗だと思う。内側に入るといわゆるインフィニティミラー構造で大きなシアターが一つある。シアターの中で自分自身のAIと対話しながら自分って何だろう、命って何だろうと考えるようなパビリオンである。建物内はAIを作るコンテンツ、外側は人類がまだ作ったことのない建築、この二つの構造だけでできている。私が万博に対して思うのは、例えばラスベガスの Sphere という直径 100m ぐらいの球体の構造物がある。



その建築費用は大阪・関西万博の全体予算よりはるかに高い 3,500 億円位で世界規模の面白いエンタメはその位の費用をかけないと作れないということである。我々の 1 テーマ館、数十億円規模のパビリオンでどのぐらい面白いものを作るかということ、どこかに絞る作業が重要となる。つまり 6 か月の期間で見せられる尖ったものは何かを考える。僕らがキーテーマで持っているのは例えば空海上人についてしっかり考え、みんなで般若心経を読み込みながら 3 年ぐらいコンテンツ作りをしてきた。仏教的な教えや自然、我々の世界観が一致している世界において、世界の中で人間と信仰とあらゆる物体の認識とがどう繋がってきたのか。ひょっとしたら今まで仏と言われていたものを計算機やコンピュータやそういった情報で表現されるものに置き換えれば、そこはスムーズに東洋的な思想と、ポスト AGI と言われているような AI 時代が繋がるのではないかと、それを我々はコンテンツとして作っている。その中に出てくる人間がどうすればデジタルヒューマンとして対応し続けることができるだろうということを考える。人間の情報を圧縮し一部 AI に変え、自分との対話をする同じようなものを作っていく。例えば Akinator アプリを使って考えると人間を圧縮するのに必要な文字数は多分 30 や 20 文字でバイト数にすれば 100 バイトほどだと思ふ。そういったことを考えた時、人はどうデジタルになっていくのかを考える作業は、お経や曼荼羅などから情報圧縮してきた我々の宗教的、文化的な背景ときわめて似ていると思う。キリスト教やユダヤ教や違った宗教があるが、こういう文化に基づけば人間は情報として圧縮されてそんなに大差はない。今 AI が発達し情報が圧縮されたりする中でどんどん繋がっていく。それを実装に落とすには、自分のデジタルヒューマンを持ち、情報をウォレットに入れて持ち運ぶ。情報をひたすら貯めて圧縮していくことが、今後おそらく起こってくる。パブリックの万博イベントで何百万人分かを一気にすると、日本国内の中で興味を持つアーリーアダプターの人たちが取組むきっかけになるのではないかと。それはレガシーとして残そうとして作っている。

◇ 宮田 裕章氏 テーマ事業プロデューサー

世界の 160 カ国が集まり、これから何をしていくのかという議論が本格的に始まった。私は子どもたちが考える万博というものをモデレートとしていただいたが、昨今問われる万博の意義という一つの答えがそこにあった。彼ら彼女たちが何を万博に期待するのか、そこで何をしたいのかと言えば、何かを持ち寄ることより未来に向けてどう歩いていくのかという問いであった。子どもたち 4 班の発表があったが、環境も地球と繋がる環境もあれば、テクノロジーと繋がりがながら環境を考えるというアプローチがあったりする。それといじめ、ディスコミュニケーションの問題。我々は政治的な文脈や各国文化の中で考えがちだが、子どもたちから見るといじめはまさにディスコミュニケーションの本質をえぐるような



話。また教育で彼らを追い詰める今の日本の課題のタイプ。勉強をするため効率よく時間を使うと時間がないのがかなり強烈で、学びそのものをきちんと捉えようという話である。一体何をしたいのか、そういった重要な場が万博だと感じた。ラウンドテーブルは3回目でのこの中の議論も繋がってきている。前回、やはり文化が大事という話をさせていただいたが、テーマウィークの一つに文化を掲げている。これは未来に繋がる問いの中でSDGsに文化がない。命のともしびを消さないのは非常に重要なことで、殺し合いをしている中でお互いに折り合いをつけて未来に向けて共有できるのかが、命を消さないということであった。この数十数年の取組みの中で、世界中で様々な実践を行い科学を積み上げわかってきたことの一つは命を消さないだけでなく生きがい大切ということ。その人らしく生きることを支援した方が圧倒的に効果があった。コロナにおいて文化は不要不急とされがちだったがそうではない。人が生きていく上で、非常に重要なものになるのではないかとということでテーマウィークの中にもこの文化が入っている。我々のパビリオンが何をするかと言うとまさにこの未来への問い。未来に向けて何を掲げていくべきなのかということで、いわゆる持続可能な未来、ウェルビーイングである。調和の中でどう世界を見ていくことができるというようなことを展示する。未来の問いの一つにアートがある。近代が積み上げたものを打ち壊した先の未来に何をするのか。少なからずのアーティストがこのようなアートを掲げ始めている。また未来に向けて何が普遍的かを考えることが非常に重要になってくる。もう一つはこの激動する時代だからこそ、瞬間の中に宿る普遍性を見出していく。万博のパビリオンは天井の壁のないパビリオン。かつて建築が果たした役割はいろんな解釈があるが、壁を作り何かを保持する存在感を見せることも非常に重要であったと思う。特に産業革命で資源を奪い合う力の象徴であったが、この変化する時代においてはそうではない。繋がりの中で広がっていくような場が必要ではないかと考えたとき、壁も天井もいらなくなって森そのものといえるようなものを作った。千利休が完成させた侘茶は本当に素晴らしいと思っているが、今現代において人が響き合うには違うスタイルもあるかも知れない。それがこの境界を突破しながら、互いを感じ響き合いながら未来を見ていくことかも知れない。そういう場を作るのがこのパビリオンの一つの方向性だと感じている。人類が数万年あるいは数十万年の歴史の中で、そして今後数万年普遍的に必要とするようなものは何か、ということ問いとして提示して一緒に未来を考えていきたい。

話。また教育で彼らを追い詰める今の日本の課題のタイプ。勉強をするため効率よく時間を使うと時間がないのがかなり強烈で、学びそのものをきちんと捉えようという話である。一体何をしたいのか、そういった重要な場が万博だと感じた。ラウンドテーブルは3回目でのこの中の議論も繋がってきている。前回、やはり文化が大事という話をさせていただいたが、テーマウィークの一つに文化を掲げている。これは未来に繋がる問いの中でSDGsに文化がない。命のともしびを消さないのは非常に重要なことで、殺し合いをしている中でお互いに折り合いをつけて未来に向けて共有できるのかが、命を消さないということであった。この数十数年の取組みの中で、世界中で様々な実践を行い科学を積み上げわかってきたことの一つは命を消さないだけでなく生きがい大切ということ。その人らしく生きることを支援した方が圧倒的に効果があった。コロナにおいて文化は不要不急とされがちだったがそうではない。人が生きていく上で、非常に重要なものになるのではないかとということでテーマウィークの中にもこの文化が入っている。我々のパビリオンが何をするかと言うとまさにこの未来への問い。未来に向けて何を掲げていくべきなのかということで、いわゆる持続可能な未来、ウェルビーイングである。調和の中でどう世界を見ていくことができるというようなことを展示する。未来の問いの一つにアートがある。近代が積み上げたものを打ち壊した先の未来に何をするのか。少なからずのアーティストがこのようなアートを掲げ始めている。また未来に向けて何が普遍的かを考えることが非常に重要になってくる。もう一つはこの激動する時代だからこそ、瞬間の中に宿る普遍性を見出していく。万博のパビリオンは天井の壁のないパビリオン。かつて建築が果たした役割はいろんな解釈があるが、壁を作り何かを保持する存在感を見せることも非常に重要であったと思う。特に産業革命で資源を奪い合う力の象徴であったが、この変化する時代においてはそうではない。繋がりの中で広がっていくような場が必要ではないかと考えたとき、壁も天井もいらなくなって森そのものといえるようなものを作った。千利休が完成させた侘茶は本当に素晴らしいと思っているが、今現代において人が響き合うには違うスタイルもあるかも知れない。それがこの境界を突破しながら、互いを感じ響き合いながら未来を見ていくことかも知れない。そういう場を作るのがこのパビリオンの一つの方向性だと感じている。人類が数万年あるいは数十万年の歴史の中で、そして今後数万年普遍的に必要とするようなものは何か、ということ問いとして提示して一緒に未来を考えていきたい。

Ⅲ ラウンドテーブル

<登壇者>

- ◇ 藤本 壮介氏 会場デザインプロデューサー
- ◇ 石黒 浩氏 テーマ事業プロデューサー
- ◇ 中島 さち子氏 テーマ事業プロデューサー
- ◇ 落合 陽一氏 テーマ事業プロデューサー
- ◇ 宮田 裕章氏 テーマ事業プロデューサー

<モデレーター>

- ◇ 高橋 朋幸氏 (株)三菱総合研究所 執行役員 営業本部長



高橋氏：第1回のラウンドテーブルでは万博に向けての京都のポテンシャルをどう生かしていくかを中心にご議論いただいた。第2回は京都での取組みや日本国際文化芸術祭に対する期待について伺った。第3回の今日は、日本国際芸術祭以外も考えていきたいと思っている。京都に限らず、万博会場との連携など、この芸術祭をどうレガシーとして残すかなどについてご意見などを伺いたいと思う。

藤本先生のお話では多様性の時代、木造の時代、人間と自然との共存など大事なキーワードがあった。キーワード像を継承していくため、この芸術祭に向けてのアプローチやポテンシャルなどについてアドバイスをお願いしたい。



藤本氏：万博会場との連動はすごくありだと思った。来年、再来年かその先かわからないが、拠点は醍醐寺さんにしっかり置いていたほうがよい。広がりを持ちつつ根っこは歴史のある醍醐寺で始まり、そこにずっと根ざしていくのがすごく大切である。一方でそこから伝統とか未来をどう繋げていくのか。伝統ある醍醐寺と世界と日本が繋がる万博会場は両極端な場所である。万博会場は広大で普通に作ると何となく焦点がぼやける。でも1個の焦点だと今の時代に合わない。リング状で中心には森がある。一つの空

を見上げると、空はシンボルであるが言ってみればみんなに開かれている自然のものであるという、これからの時代をある種象徴するような作りではないかと思う。拠点としての醍醐寺さんと未来を見据える万博という両拠点で芸術祭が行われると面白い。リングの上も多様な用途で使える広場があり、水に面した場所、木々に囲まれた場所もある。可能性はすごく大きく自分も万博会場にいる時は色んな形でお手伝いできればと思う。

高橋氏：石川先生、テーマウィークと未来社会のショーケース、キャッシュレスなどについてご紹介をいただいたが、未来への文化共創というテーマとこの芸術祭が連携できそうなテーマについてご意見をいただきたい。また、次世代リーダー育成事業のレガシーについてもお聞かせいただきたい。



石川氏：テーマウィークは期間を定めて会場内をそのテーマで一色に染める。世界中から参加される色んな人たちが、様々な視点から主に課題というものをどう捉えるか意見を出し、対話をして行動に繋げていく取り組みである。その一つが文化で、関西広域、日本全国、世界中でしていただくことは大歓迎であり、そういう仕組みも取り入れようとしている。大事なことは意見を言い、認め合い何か課題があればそれをどう解決していくかについて皆で取り組むことということ。万博はそれに非常に適した場所である。多くの企業の方々や様々な文化を持つ人

たちが参加しているということで、普段では気づかない気付きに出会えるのではないかと。文化ウィークの会期中に国際芸術祭のプログラムをテーマ連携させることも非常に面白いのではないかと。

次世代リーダー育成事業、事業企画スペシャリスト養成講座は、今おられるプロデューサーの方々にもご協力いただき開催している。講座では今後の企業を背負う若手、次世代の人々が参加し、社会の様々な分野で活躍されている方の考え方や事業企画における技術的なことなどを学んでもらい、午後からワークショップを行う。実際にテーマを与え、自ら企画を考え、塾生同士が議論しグループワークなどでソリューションを考えるような企画である。今年は日本国際芸術祭プログラムの位置づけで開催したが、文化を活性化させていくのも事業を活性化させていくのも基本的には人のアクティビティにかかっている。特に次何をやればいいのかかわかりづらい時代の中、1人1人の問題意識やそれを解決するための色々な考え方や技術的なことが、結果として社会・世界を動かすということになってくる。そのための基本的な考え方、技術も学ぶような場を設けた。参加者には少しでもそういう事に気づいてもらえたのではないかと。将来に渡り継続していければと思うし、日本国際芸術祭とともに発展させていければよい。

高橋氏：石黒先生、日本の歴史とロボットの関わり等について少しご紹介いただいたが、第2回日本国際芸術祭に向けた考えなどお聞かせいただきたい。

石黒氏：ガラスや鉄でできた少し前のヒューチャーリスティックな未来と違い、もっと文化が豊かになって行くのが未来だと思っている。テクノロジーが進めば文化や自然を取り戻すことができる。そういうことで、今回醍醐寺で万博の宣伝も兼ねてAndroidを置かせていただいたがとても調和しており良い展示ができたのではないかと。もちろん来年もできれば少なくともAndroidの



展示を続け、万博の進捗などを見ていただければと思う。芸術祭では京都の精華町のATR、新しい万博の展示に繋がるような技術開発の成果を芸術作品として展示した。少なくともそれは引き続き改良して展示させていただくことができる。今年よりもう一段進んだものを展示し、ロボットがどれほど人間らしくなれるのか、ロボットと人間の間でどのようにして心を通わせることができるのかを感じてもらえれば、更に万博への期待感が高まるのではないかな。

高橋氏：中島先生、アフリカでの出会いや命の祭りなどについてお話があった。醍醐寺にはインバウンドの方も結構来られるが、世界的な人たちとの交流についてアイデアをいただきたい。



中島氏：改めて醍醐寺で開催できるのは光栄である。空間、空気、音や匂いなど言葉にできないが、その中で何かを作り出すのは本当に幸せだと思う。多くの子どもが参加し、お客様の中には国際的な方もいて国際色豊かであった。醍醐寺様と声明を一緒にさせていただくなど、来年もできれば色々な特性を持っておられる方々にも来ていただけるよう準備ができればいいと思う。展示以外にも0-120歳の子どもたちと出会い、何かを作り、最終的には音楽など一緒に体験するという形がいいと思っ

ている。それが世界中の多様な人に広く、面白いと十分告知し、京都の方々や京都以外の方にも来ていただけるという流れになると素敵である。そして空気を感じてもらいたい。万博会場はもともとゴミでできた島であり、だからこそその空気感があると思う。万博会場や醍醐寺さんが繋がり合うような連携イベントで、万博会場の賑やかであくせくする感じに対し、心を静める醍醐寺と往来できれば素敵である。

高橋氏：落合先生、大規模言語モデルや宗教的文化的背景といった話をお伺いしたが、次に何か考えられていることがあればお聞かせいただきたい。



落合氏：芸術祭もカルチャーで芸術祭をしている人は多くいる。自分は展示をするのが好きで、醍醐寺で展示するのも好きだが、最近の興味としては、今でも見られる古い手紙や書き残したものをどうするか、（例えば梵字を作ることや販売するための展開など）について考えることが非常に面白いと思っている。京都には有名な芸術系もあるが、醍醐寺には石の時間や紙の時間、木の時間が豊かなので、何かヨーロッパから持ってきたもの、エンタメやテックで面白そうなものを持ってくるのではな

く、我々はそういうことを考えることが重要だと思う。こういった文化遺産をどう今の話に落とし込むかというところでは、非常に豊富なデータがあると思うので、それとのコラボを楽しくやりたいと思う。

高橋氏：宮田先生、空間展示に取組まれて未来への問いや普遍性、未来に向けて何をしたいのかという話があったが、次回の芸術祭でのアイデアなどについてお聞かせいただきたい。

宮田氏：残照は場所により展示方法を変えている。最初は弥勒菩薩の梵字を模してつくった。日本芸術祭という名前は、京都大学や東京大学、日本大学にもあり、名称でどちらの格が上と言うことでなく色々あってもいいと思うが、特徴を出していかなければならない。包括的な名前を掲げる一方でそれが総花的にならないよう特徴を出していくのは非常に必要である。そういう意味でアカデミアの方と連動するのは結構大事でユニークなファクターとなる。アカデミックな部分



はアート側からも重要な要素に最近なっている。未来の問いを考えた時、今までのポストモダンの近代を打ち壊す中でも必要であったが、未来と繋ぐにはそういう関わりも必要となる。万博は文化ウィークがあり、文化庁も移転した京都、文化という面でコラボする可能性がある。万博の一番の特徴は、世界各国が6ヶ月間集うということ。万博期間中に盛り上がりレガシーが生まれるだけでなく、その先に日本国際芸術祭が繋げていくなら、この文化の対話を継続的なものとして繋ぐことを前提にコラボレーションすれば非常に価値はある。京都から世界へと世界の人たちが京都でというこの双方が繋がり国際的になってくる。多様な国の人たちが表現することが重要となる。中国がスローダウンする中でグローバルサウスが非常に重要となるが、我々はグローバルサウスの国々がどこにいて何を大事にしているか知らない人が多い。いわゆる旧来的な万博定義に則ったとしても、すごく大事な部分である。彼らが大切にしているものに寄りながら、日本の文化との接点を持つことで新しい可能性が生まれる。日本国際芸術祭の特徴というものをしっかり確立した上で、万博との繋がりの中で繋げてその先を見る礎。1年目2年目は難しいかも知れないが、未来を見据えた上で軸を作っていくことが必要ではないか。アカデミアというほかにない軸と国際、世界各国との繋がりの中核と思う。

高橋氏：プロデューサーの先生方より次回に向け貴重なアドバイスをいただいた。宿題の部分についてはしっかり取組んでいきたい。



IV 閉会の挨拶

◇ 仲田 順英氏 世界文化遺産 京都 醍醐寺 執行・統括本部長



先生方、本当に貴重なお話をありがとうございました。醍醐寺は来年 1150 年を迎え、色々と多くのものが傳承されている。その長い歴史、1100 年前の方が現在の様子をももちろん思い浮かべていたわけではないが、きっと先生方のように未来を見つめ、何かを未来のために残したいと思い、その一つがお寺ではないかと思う。1100 年前の建物が未だに残っている。仏様も 1000 年の歴史ある仏様である。そういう歴史を積み上げてきたということ。事実だけが残ってきたわけではなく、そこに心がこ

もり文化があったからこそ今我々がいる未来がある。ならば私達がこれから先の未来を考えた時、この万博のテーマは非常に大事で、多分世界中にとって今一番欠けている部分なのかもしれない。いのちを考える、未来の文化を考える、そして心を考える、まさしくそういう万博であることに対して、醍醐寺も精一杯お手伝いできれば思っている。今後とも万博の成功に向け、醍醐寺も京都の宗教界もいろんなところから協力をいただきながら取組みたい。色々な壁があるかも知れないが心は一つだと思うので、乗り越えて万博の成功に向かって皆さんと一緒に頑張っていければと、先生方のお話を聞いて強く思った。2023 年 11 月 10 日に急逝した座主の願いも万博の成功であった。私たちはその想いをしっかりと継いでいきたいと思っている。本日は皆様方、誠にありがとうございました。

以上